

初等教科科目：初等生活

担当教員：金子省子・隅田 学・高橋治郎・日詰雅博・向 平和

「生活科」の学生の理解と興味

理科教育講座・日詰雅博

1. 授業の概観

本講義は生活科に関する初等科目のうち、理科・家政の教員が5名で担当している。内容はおよそ次の通りで、分担して実施している。

隅田 子どもと自然とのかかわり
金子 自己認識をめぐって
高橋 子どもは遊びを通して何を学ぶか
向 子どもにとっての自然環境など
日詰 生活科における飼育・栽培

担当した飼育・栽培については、初回の後半の時間を使って、体験活動のための班分けと説明を行った。ウサギ飼育2班、モルモット飼育2班、熱帯魚飼育1班、野菜栽培7班であった。授業期間中継続的に飼育・栽培を行い、活動記録ノートをとらせた。最後の時間に、班毎にポスターを使った発表を行わせ、活動記録と発表によって成績を評価した。目的は、飼育・栽培の楽しさと難しさを体験し、生活科においてどの様に活動に取り入れて指導するかを考えさせることである。

2. 授業評価法

授業時間ごとの学生の評価を、学生にとって有意義であったかどうかを、アンケート調査した。有意義であったものとそうでなかったものについては、理由を自由記述で書かせた。私が担当した飼育・栽培では、生活科におけるその役割を理解しているかどうかを調べるために、「飼育や栽培が生活科の中で取り上げられている理由をどう考えるか？」と問うた。また、小学校の時に自分が受けた生活科の授業のなかでの飼育・栽培体験をたずね、その時は飼育栽培をどのように感じていたかをたずねた。

また、教育コーディネーター会議からの依頼により、カリキュラム・アセスメントの一環として、各授業とDPとの整合性を検討するための質問調査を行った。

3. 授業評価結果

講義ごとの学生が有意義であったかどうかをたずねた結果は表1の通りであった。

第1回 イントロダクション／生活科の概要

第2回 子どもと自然とのかかわり (1)

第3回 子どもと自然とのかかわり (2)

第4回 子どもと自然とのかかわり (3)

第5回 自己認識をめぐって (1)

第6回 自己認識をめぐって (2)

第7回 自己認識をめぐって (3)

第8回 遊びとは何か

第9回 子どもは遊びを通して何を学ぶか

第10回 「冬と遊ぼう」と「学校探検」

第11回 素材の教材化

第12回 テーマおよび表現の工夫

第13回 子どもにとっての自然環境

第14回 生活科における飼育・栽培

第15回 飼育・栽培体験発表会

表1 授業回毎の学生の認識

回	○	△	×	空欄	合計
1	20	16	0	15	51
2	31	7	0	13	51
3	39	12	0	0	51
4	44	6	0	1	51
5	30	17	4	0	51
6	28	19	3	1	51
7	28	20	2	1	51
8	36	14	1	0	51
9	36	11	3	1	51
10	41	8	0	2	51
11	38	10	3	0	51
12	39	11	0	1	51
13	38	12	0	1	51
14	39	11	1	0	51
15	46	5	0	0	51

○：有意義だった、△：普通、×：有意義でなかった。空欄は、ほとんどが欠席である。

学生に、有意義だった理由や、そうでなかった理由を書かせたところ次のような理由が多かった。
(有意義だった理由)

- ・ 実践にすぐに使えそうだから。
- ・ ものづくりや体験が出来たから。
- ・ 実際に野外で活動や観察できたのが良かった。
- ・ 遊びの中にも学びや成長できる点があることがわかった。

(そうでなかった理由)

- ・ 話だけの講義であった。
- ・ 理論的な話であった。
- ・ 理解できなかった。
- ・ 生活科とのつながりがわからなかった。
- ・ 自己理解が浅いまま終わった。

以上のように、学生の講義に対する感想は非常に素直なというか安直な回答であった。即ち、講義は嫌いで、作業や活動は好きであるということである。どのような内容であれ、何のために勉強しているのかということが3回生になっても認識できていないように判断できる。

生活科の目的と目標を書かせた。しかしながら、満足に書けたものはわずかであり、生活科の目的目標さえも、必修の初等生活科教育法と選択の本講義を受講した後にまだ認識できていないことは、学生側の大きな問題である。中学・高校など他の校種を目指しているにしても、生徒が生活科で何を学んできたかを知っておくことは必要である。

担当した飼育・栽培体験について、次の2点についてたずねた。

(小学校の時に飼育栽培をどう感じていたか?)

- ・ 生活科で体験したことはない。
- ・ サツマイモやトウモロコシを栽培し、芽が出たときはうれしく、収穫して食べたときは“自分がちゃんと育てた”という実感があった。
- ・ 飼育栽培は楽しかった。
- ・ あまり感動はなかった。
- ・ 義務でいやいや行っていた。

楽しかったと感じている学生といいやいややっていたあるいは全くしなかったという学生に大きく2分される。これはおそらく担任教員の得手不得手の問題と判断できる。少なくとも、小学校教員は、自分が得意でなくても児童の学習の機会を奪ってはならない。

(飼育や栽培が生活科の中で取り扱われる理由は何か?)

- ・ 命の尊さに気付くことだと思う。
- ・ 自然とのふれあいの中での体験が重視されているため。自然や生き物と接することの大切さを感じるため。
- ・ すべての子供が家庭で飼育や栽培の場があるわけでないので、児童に体験の場を提供する。
- ・ 活動に対する責任感を体感させる。
- ・ こどもたちに多くの発見や学びがある。
- ・ 生命の成長を実感できる。
- ・ 活動により培われたことが、今後の学習の基礎となる。

- ・ 地域の人や家族との関わりも学べる。

受講生の回答からは、飼育・栽培活動を通して、生命の尊さ、生き物のたくましさ、生き物に関わる楽しさ・驚きとその責任など多くを学んだようであったが、活動の様子を見ていると、かならずしも全員が熱心に取り組んでいるわけではなく、世話をサボったり、動物を殺したりしたが、生き物から多くを学んで、これからの学習や教育に生かしてもらいたいものである。

4. まとめ

やはり感じるの是一方的な講義ではなかなか理解させることは難しく、学生が主体的に目的を理解して活動・勉強することによって、はじめて講義や実験の理解が深まることである。いかに主体的に勉強させるか、また、グループ活動させることにより人間関係やコミュニケーションのとり方、責任感など、人としての基本を卒業までに学ばせることが急務であると考えられる。



図 1 15 回目の飼育・栽培体験の発表会の様子

★ 授業と DP との整合性を検討するための質問調査の結果は次の表の通りであった。

学校教育教員養成課程

	1	2	3	4	合計
DP1	0	6	25	2	33
DP2	1	9	20	3	33
DP3	0	8	24	1	33
DP4	0	5	23	5	33
DP5	0	7	18	8	33

特別支援教育教員養成課程

	1	2	3	4	合計
DP1	5	8	4	1	18
DP2	5	8	4	1	18
DP3	0	6	9	3	18
DP4	1	4	11	2	18
DP5	3	6	7	2	18